

長崎県松浦市の鷹島沖で見つかった、元寇の沈没船とみられる船体の竜骨（キール）部分＝23日（琉球大考古学研究室提供）



☆「元寇」とは、今から何年前に起きたどんな出来事だったのかな？調べよう

元寇船を発見 構造残し初

琉大池田教授が発表

長崎沖海底

鎌倉時代に来襲した元寇の沈没船とみられる船体が長崎県松浦市の鷹島沖で見つかったと、調査した琉球大の池田栄史教授（考古学）が24日、長崎市で記者会見し、正式に発表した。池田教授らによると、元の船のものとされる木材などが過去に見つかっていたが、構造が分かる状態で発見されたのは国内初。主に文献や絵で伝えられてきた元寇の実態解明につながる、重要な手掛かりになり

そうだ。

池田教授は会見で、沈没船の研究が進むことにより「当時の造船技術や、東アジアの交流の実態も分かるだろう」と話した。

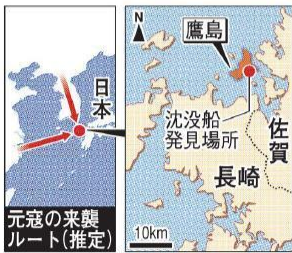
確認されたのは、船首から船尾までを通す約12分の竜骨（キール）と、その両

側に整然と並んだ、舷を構成する幅約15〜25センチ、厚さ約10センチの外板など。竜骨は一部とみられ、船の全長は20メートルを超えるという。

竜骨の両側は白灰色の塗料が塗られていた。外板にはくぎで留めた箇所や、隔壁をつなぐ木組みが残っており、船底から中国製のれんがや硯、元軍のものと思われる武器「てつほう」なども見つかった。

竜骨の構造や船底の形が、同時代の中国の船と似ていることから、元寇の船と判断したという。

船は水深20〜25メートルの海底から、さらに約1メートル掘った場所で発見された。池田教授は、現在まで残っていた原因について「海底の砂に埋まっていたことが大きい」と分析した。



(2011年10月25日付 1面)

年 組 名前